

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2003年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	観光学	研究科	観光学	専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名			
	立教大学観光学部・教授	稲垣 勉 印			
<b>自然・人文の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名		
<b>研究課題</b>	タイ北部の山地民社会におけるエコツーリズムのポリティカル・エコロジー論的研究				
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名			
	観光学研究科・観光学専攻・博士後期3年	須永 和博 印			
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名			
<b>研究期間</b>	2003 年度				
<b>研究経費</b>	195,183 千円				

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、タイ国において王立森林局主導の森林政策のなかで「森林破壊者」として周辺化されてきたタイ北部の山地民族らが、NGOらと連帯して行っているエコツーリズムの文化人類学的研究を通じて、王立森林局のイデオロギーである自然環境主義に対して、対抗的な自然観を構築するカレンの社会的・文化的実践を明らかにする。同時に、エコツーリズム開発に関わるさまざまなアクター間の社会的関係に着目することで、エコツーリズムのポリティカル・エコロジー論的研究という新たな理論的枠組みを提示することを目的としている。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[エコツーリズム] [ポリティカル・エコロジー論] [タイ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

筆者は、本助成金を通じて、大きく分けて以下の3つの項目について、広く文献収集を行うと同時に、タイ北部において現地調査を行った。調査の期間は2003年6月から9月、2004年1月から4月にかけてである。

## (1) エコツーリズムのポリティカル・エコロジー論的研究

タイ国においては、王立森林局が中心となり、1990年代以降、国立公園などの森林保護区の拡大を進めてきた。タイ国の国立公園制度は、1960年代にアメリカの国立公園制度をモデルとして移入されたものであり、その理念は、「手つかずの自然を守る」という西欧流の自然環境主義であり、保護区内の人々の居住を認めていない。このような西欧流の自然観をもつ王立森林局は、国立公園内におけるエコツーリズムを推進する重要なセクターである。

これに対して、タイ北部では、一部のタイ知識人や NGO と、農村社会の人々が連帯して行っているパーチュムチョン運動(森と人間の共生が可能であるという前提のもと、農村共同体に資源管理を委譲する運動)と呼ばれる環境運動が盛んであり、その一環として、村落レベルでエコツーリズム開発が盛んに行われている。

近年、観光研究において、近代観光に対するオルタナティブとしてエコツーリズムの可能性を論じた研究が散見されるが、多くの場合「理念」ばかりが強調されすぎ、それを受け入れる側の視点にたったミクロなレベルの研究は少ない。これに対して、筆者の研究では、文化人類学的なフィールドワークの利点を活かして、タイ北部の山地民カレンのエコツーリズム開発受容の過程を明らかにした。

また、従来のエコツーリズム研究においては、「観光と自然保護の両立」という命題にとらわれるあまり、「自然保護」というものを所与のものとして、非歴史的にとらえられてきた。その結果、「自然」という概念が社会的、歴史的に構築されたものだという認識、あるいはさまざまなアクター間の自然観をめぐる交渉といった問題は等閑視されてきた。これに対して、筆者の研究では、「自然」というスペースを、さまざまな社会的セクターの相互連結が、支配と不平等とコンフリクトによって特徴づけられる領域として捉えることで、エコツーリズムのポリティカル・エコロジー論的研究という新たな視点を提供するものである。

## (2) 観光開発のローカル化

調査村では、村びとがローカルガイドとして積極的に自分たちの慣習について語るという光景をしばしばみかける。しかし、地形的、儀礼的配慮に基づき行われてきたカレンの森林利用は、生活のなかの利用をとおして身体性のもとでとらえられてきた慣習的行為であり、それを外部者であるツーリストに説明する際には、何らかの理念化・単純化が必要になってくる。また、そもそも欧米人の自然観をベースに欧米の観光市場のなかで生まれてきたエコツーリズムを非西欧世界が導入するにあたっては、多くの論者が論じているように、西洋流の「理念」の枠組みに自然、慣習などを取り込む必要がある。

調査村では、森林利用の地図化とローカルな慣習の翻訳という方法でこれを実践している。まず、森林利用の地図化である。H村ではカレンの森林利用をモデル化した地図があり、ツーリストに対し、地図を通してカレンの森林利用が説明される場合がある。地図上では、「保護林」(pa anurak)、「水源林」(pa ton nam)、「使用林」(pa chai soi)などと分類がなされているが、実際にはカレンの森林分類はより複雑である。地図作成の過程で、カレンは本来、ローカルで複雑な森林分類を、「保護林」、「水源林」、「使用林」といった、より普遍性をもった語に翻訳しているのである。また、これまで見てきたように H村の村人は、ツーリストに対し、自分たちの慣習を生物多様性、無農薬野菜、水源林保護といった環境保全のイディオムを用いて語る。これは、村人にとり、ローカルな慣習をより普遍的な環境保護のイディオムへと翻訳する試みであると同時に、カレンの森林利用を環境保護のイディオムに節合させることで、自らの身体性から切断して、客体化しているといえる。こうしたカレンの人々の実践は、焼畑の規制が高まる

**研究成果の概要 つづき**

なか、政府をはじめとする外部者との交渉のためのスペースを構築し、さらにカレン自身が持続可能な森林利用を意識化することにつながっているのである。

これまで、一部の論者のあいだでは、非西欧社会におけるエコツーリズム開発を、土着の自然観の欧米流エコロジー概念への従属を生むという意味で、エコツーリズムもまた植民地主義的であるという批判がなされているが、筆者は上述のようなカレンの社会的・文化的実践を、エコツーリズムのローカル化という創造的行為として積極的に捉えたい。

また、調査村では、村びとは、もともと行っていた生業とエコツーリズムの両立に強い関心があり、利益の極大化、拡大再生産といった「事業の論理」とは異なる発想で観光に関わっている。しかし、近代的観光開発がローカルな社会を観光という不安定な市場に従属させるといういびつな構造をつくりあげてきたとすれば、既存の生業との両立を確保し、観光に従属するのではなく、むしろ観光を「飼いならそう」としているカレンの実践は一定の意味を持っているであろう。また、地域社会の人々が「事業の論理」とは異なった発想から観光に関わるということは、山地民カレンに限られることなく、多くの論者がさまざまな地域を事例として報告している。しかし、観光の経済的効果や地域の活性化に焦点をあてる今日の観光研究のなかで主流となっている産業論的パラダイムでは、「事業の論理」とは異なる発想で観光に関わっていかうとするローカルな社会の人々の実践を理論化することはできない。確かに、観光対象となる社会の人々に観光による経済的利益をいかに保証していくのかという視点は必要であろうが、そうした視点を産業論的パラダイムとは異なるやり方で理論化していく必要があると考えている。この点について、筆者はきちんとした理論化をするための力量にかけており、今後の課題としていきたい。

**(3) NGO 運動における「ローカルな知恵」の再構築**

近年、反グローバル化のさまざまな NGO 運動のなかで、タイ国のみならず、環境保全の上で地域共同体の民俗知識や宗教実践に着目する議論が散見される。しかし、従来の視点では、地域共同体を所与のものとして、静態的に捉え、地域住民の「土着の知恵」や伝統宗教を実体化・固定化して語るという傾向が強かった。このような傾向は、タイ国の一部知識人が生産する「土着の知恵」に関する言説にもあてはまる。これまでこうした言説に対する批判は、都市の生活者の論理にもとづく農村社会のロマン化として多くの論者によって提出されてきた。そうした批判は、ある程度の得ているとはいえ、一方では地域社会の人々が NGO 運動とそのなかで構築される「ローカルな知恵」をめぐる言説をどのように受容しているのかという、地域社会の反応、あるいは地域社会の主体性を捨象してしまうという問題点がある。それに対して、筆者は、自然資源管理の主体としての「共同体」や、「ローカルな知恵」にもとづく「伝統的な」資源管理システムが、さまざまな現実的な問題と交渉する過程で、新たに再構築・再創出されるという視点にたつ。NGO 運動における文化の再構築・再創出に着目する本研究は、地域共同体による自然資源管理を理解する上で、新たな視点を提供すると考える。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**雑誌論文**

須永 和博 「エコツーリズムのローカル化—タイ北部山地カレン社会を事例として」『立教観光学研究紀要』6号、2004年、3-14頁。

須永 和博(投稿中)「自然／文化をめぐる交渉—パーチュムチョン、ライムンウィアン、そしてエコツーリズム」『タイ研究』日本タイ学会。

**口頭発表**

須永 和博 「エコツーリズムのポリティカル・エコロジー研究—タイ北部山地カレン社会を事例として」第18回日本観光研究学会全国大会、2003年11月29日、島根県立大学。

須永 和博 「自然／文化をめぐる交渉—タイ北部山地カレン社会におけるNGO運動とエコツーリズム」第1回人の移動と文化変容研究センター・観光プロジェクト研究会、2004年1月9日、立教大学。